

私の道標

岩手県盛岡市立飯岡中学校

三年 大 櫻 美 琉

「学校に行きたくないな」中学校に入ってから、私は、何度この言葉を言っただろう。よく言う日は決まっている。それは日曜日の夜だ。明日からまた学校が始まると思うと、つい口から出てしまう。そう、以前の私は学校が嫌いだった。それには二つ理由がある。

一つは自分に自信がないからだ。外見もだが中身にも自信がない。一番の原因は人と話すのが苦手なことだ。人見知りが激しいというわけではないが、ただ苦手なのだ。私は話が合う人としが長く会話が続かない。沈黙が続くと相手に何か変に思われなかな、と深く考えてしまい、それを避けたいがために人間関係が面倒くさいと思うようになったのだ。

二つ目の理由は、勉強があまり得意ではないことだ。授業はどんどん進んでいく。こつこつ進めるのは嫌ではないが、スピードについていくのが大変だ。授業中ががんばって解いても完璧にすることができないのだ。自分から発言する人を見ると、信じられない、すごいと思ってしまう。中学校に入ってから人間関係と同様に勉強も面倒くさいと思ってしまうようになった。

そんな私に力をくれたのは母だ。私の母は専門学

校に通い、介護の勉強をしている。半年前の三月まで母はスパーでパートをしていた。その母から最初この話を聞いたときはとても驚いた。なぜ母は急にこんな思いをもったのか、母は次のように話してくれた。「私や弟の成長を見ているうちに、自分にはまだできることがあるように思えた。何かやりたかった」と思ったとき、社会の中で必要とされているが不足している介護の仕事をした」と思った。そして、「命に関わる仕事なので専門的な事をしっかりと学んで資格を取ってから仕事に就こう」と専門学校に入ることを決めたのだ。

しかし、家族の反対がなかったわけではない。介護の仕事のイメージと、私の知っている母の性格が合わないように思ったが、今までに見たことのない母の熱意を感じた。父や祖父母たちは「二年間は学校に通わなければならないし、どうせ働くならすぐに収入が得られる仕事に就いた方がよいのではないかと、本当に十代二十代の人たちに混じって最後まで続けられるのか」という理由で反対していた。結局母は家族全員の賛成が得られなまま、四月に専門学校に入学した。

それまでの母は家のだれよりも早く起きていたのだが、それから、さらに早く起きるようになった。まず掃除、そして家族の朝食の準備を調べると、家族のだれよりも早く家を出る。一番に学校に着いて、勉強をするのだそう。私が学校から帰ると母はまだ帰ってきていない。日がすっかり落ちて暗くなったころ、母は大急ぎで帰ってくる。それから夕食の準備、洗濯、アイロンがけと家事をする。どんなに忙しくても母は家事の手を抜くことはない。座っているのは勉強しているときだけだ。母は勉強する時間をもっとほしいと言う。母は家族のことをきちんとすませてから自分の勉強を始める。そんな母の姿

を見て、少しでも勉強する時間を作ってあげたいと思ひ、私も弟もできることは自分でやるようになり、手伝うようになった。見習わなければならないな、と思う。母が入学してから約半年が過ぎようとしている。母は一度も弱音をはいたことはない。むしろ楽しそう。学校から出される課題は喜んでやっている。難しい内容も多く、覚えるのも大変だと言っている。自分で暗記カードを作ったり、私や弟を相手に問題を出させたり、いろいろ工夫して勉強している。そのときはいつもとちがう母の顔になる。私と弟が介護される役となり、体を起こしてもらったり、着替えをしてもらったりするのだ。

この半年ががんばってきた母を私は、心から尊敬する。かっこいいと思う。初めは反対していた父も、最近は休みの日に晩ご飯の支度することが増えてきた。私にも変化がある。母を見て私も何かに挑戦してみようと思うようになった。そして、漢字検定の三級まで合格することができた。今は二級に向けて勉強をがんばっている。自分でやろうと思っただけで勉強は楽しいと思うようになった。いつのまにか学校へ行くことも面倒だとは思わなくなっていた。

母は、介護の仕事は、人の気持ちを理解して尊重することが大切だと言う。人間は一人では生きられない。人間関係はもとより面倒なものなのだ。だから、相手を理解しようという思いが大切なのだと思う。私は最近、母のように真つすぐに夢に向かって努力したいと思っている。母は私の道標であり、一つの目標だ。家族や今周りにいる人たちを大切にしたい。一日一日を過ごしていきたい。いつか母を超えられるように。